

東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 入試課入学試験係 TEL 042-330-5179 <http://www.tufs.ac.jp/index-j.html>

改革力 世界と多言語・多文化社会の平和と共存・共生に貢献する



池端雪浦学長

Ikehata Setsuho

いながらにして、世界と交流できるキャンパス

武蔵野の面影を残す緑豊かなTUFUSのキャンパスを歩くと、あちらこちらで留学生と日本人学生がさまざまな言語で語り合う姿を目にすることができます。また、カフェテリアにはノートパソコンを広げてインターネットで外国の新聞を読んでいる学生たちの姿が。この風景こそが、TUFUSの実力と可能性を物語っています。いながらにして、世界の生の情報にアクセスし世界の人々と交流できる環境、そして、その環境を活かすことができる人材——。

TUFUSは2000年に府中市に移転しました。それを機に、構内各所から無線LANを使ってインターネットに接続可能なユビキタス・キャンパス⁽²⁾と、敷地内にある留学生日本語教育センターの多くの留学生や外国人研究者が暮らす、国際的キャンパスが実現しました。

世界でも有数の外国語教育研究機

Tokyo University of Foreign Studies (TUFUS=東京外国語大学)は、その名の通り、50を超える言語の教育を核として、世界諸地域の文化と社会の総合的な教育研究活動を行う大学です。世界の人々が共存・共生できる平和な社会の実現に貢献することを目標に、地域の個性と世界の仕組みを理解し、多言語・多文化社会⁽¹⁾で活躍できる人材を養成しています。世界各国の600人を超える留学生と日本人学生が、さまざまな言語を使って交流し共に学ぶ緑豊かなキャンパスは、国際社会にデビューする最初の舞台です。

関であるTUFUSの教育の特徴の一つが言語教育であることは言うまでもありません。入学時に専攻する専門言語は26。その他の科目も加えると、外国語学部で学べる言語は50を超えます。言語は、世界を理解し世界に貢献できる人材となるためのスキルであり、スキルを身につけていなければ、何もできません。しかし、池端雪浦学長は、「東京外国語大学の本領は、言語教育の先にあります」と強調しています。専門教育では、世界諸地域の文化と社会を、さらには、グローバルな思想潮流や国際関係を学ぶコースが用意され、世界の今に触れる教育が実施されているからです。

TUFUSは言語教育と専門教育の双方を重視する大学だと言えます。TUFUSでの4年間は、多様な言語と文化に触れ、それを理解し、問題解決能力を身につけるための時間なのです。

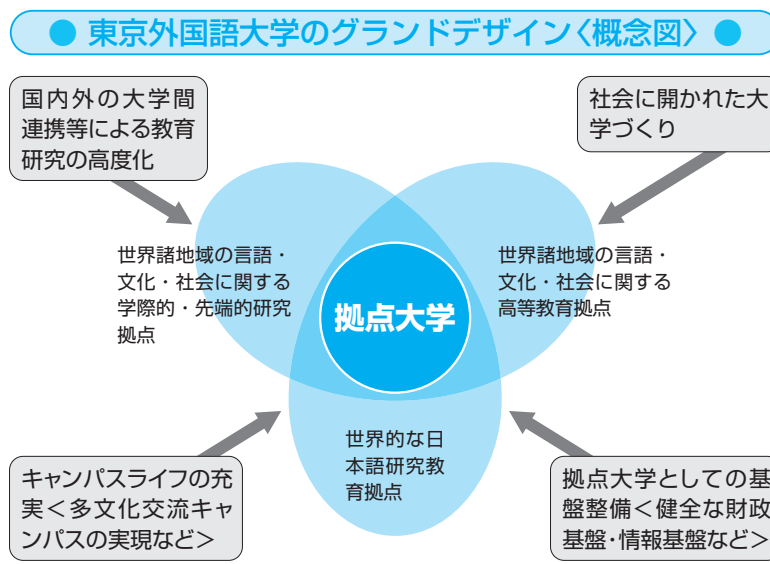
少人数での密度の濃い教育を受けた卒業生は、国際社会で活躍する人

材の宝庫です。通訳、国際ジャーナリスト、企業の国際部門で活躍するビジネスマンなど、世界の大都市で、また、世界の隅々の意外な場所で、卒業生たちは活躍しています。

学部と大学院が連動した5年一貫制コース

TUFUSは、「外国語能力を持ち地域の個性と世界の仕組みを理解した国際教養人」の養成を学部教育の目標としていますが、大学院では一歩進んで、「多言語・多文化社会の接点として活躍できる高度専門職業人」の養成と「世界諸地域の社会や文化について先端的な研究を実践できる研究者」の育成を目指します。

大学院地域文化研究科は、研究者と高度専門職業人の2種類の人材育成機能を明確にするため、2006年度から大きく改編され、研究者育成の「言語文化」「地域・国際」と、高度専門職業人を養成する「言語応用」「国際協力」の4専攻体制となりました。



高度専門職業人養成に特化した言語応用専攻には「日本語教育学」「英語教育学」「言語情報工学」「国際コミュニケーション・通訳」の4コースが、「国際協力」には「国際協力専修」と「平和構築・紛争予防専修」の2コースが設置されます。このうち、言語応用専攻の各コースと、国際協力専攻の国際協力専修コースの計5コースには、学部大学院5年一貫制⁽³⁾が導入され、5年間で修士号を取得することも可能です。

トルコ、エジプト、レバノン、イランの新聞を毎日翻訳

1857(安政4)年の蕃書調所を源流とする伝統ある東京外国語大学を支えているのは、学際性と総合性に際立つ教育・研究の力です。全国共同利用研究所⁽⁴⁾でもある「アジア・アフリカ言語文化研究所」が展開する先進的な研究活動をはじめとし、文部科学省の21世紀COEに2つの研究(P.34~37参照)が、特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)に2つ、現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)に1つの教育プログラムが採択されるなど、活発な研究、教育活動を展開しています。

現代GPに採択された「在日外国人児童生徒への学習支援活動」は、在日外国人の子どもの学習を支援す

る学生ボランティアを組織し、その活動を支えるプログラムです。日本在住者の2%近くが外国籍の人々となった今日の状況に対応した企画であり、多言語・多文化社会理解に秀でたTUFUSの特色を活かした社会貢献の取り組みだと言えます。

05年度には、「中東イスラーム研究教育プロジェクト」がスタートしています。今日の世界のキーワードとも言える「中東」や「イスラーム」を理解するためにはなくてはならない活動です。プロジェクトの一環として、学生たちが大学院生のアドバイスを受ながら、トルコ、エジプト、レバノン、イランの新聞を翻訳し、Web上に公開しています。現地発の報道から直接、人々の生の声を聞くことは、中東理解の手掛かりとなります。

「世界の国々を訪問して誇らしく思うのは、本学の研究者や卒業生には、現地の言葉で研究したり仕事をする事ができる人材が溢れていることです」と、池端学長は語っています。「英語はもちろんですが、英語を介さずとも、諸地域の懐にザクッと飛び込んでいける人材が大勢いる。また、そういう人材を育てるのがTUFUSなのです」

一体化と差別化が同時進行する現代国際社会にあって、世界の共存・共生に貢献するTUFUSの役割は、ますます重要になっています。

言語教育を核に、世界諸地域の文化と社会、そしてグローバルな思想潮流や国際関係を総合的に教育・研究する。

Notes

1 多言語・多文化社会
人々が地球規模で活発に往き来するようになったことで、複数の言語や文化(習慣、価値観、宗教など)を持つ人々が、地域や学校、職場などで隣り合って暮らすようになった社会。

2 ユビキタス・キャンパス
学内のどこからでもインターネットに接続可能な環境を整備したキャンパス。教室だけでなく、食堂や図書館の全席からメールの送受信やウェブへのアクセスができる。

3 学部大学院5年一貫制
学部在学中に大学院の単位の取得を可能にし、大学院修士課程の在学年数を短縮する制度。対象者は3年次から特化コースに属し、4年次から大学院科目を履修する。

4 全国共同利用研究所
大学の枠を超え、全国の研究者が利用することができる組織。全国に19研究所があり、アジア・アフリカ言語文化研究所は、文科系唯一の全国共同利用研究所。

研究力 誰でも、いつでも、どこでも 17か国語をネットで学べる



川口裕司教授

Kawaguchi Yuji

フランス語学習サイトを体験

インターネットで「TUFSS言語モジュール⁽¹⁾」のフランス語サイト (<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/fr/>) に入ると、トップページには発音、会話、文法、語彙などのタグがあり、クリックすると、それぞれの学習が始まります。

発音をクリックすると、最初に、ヴェルレーヌの詩の朗読を聞いて、美しいフランス語の音の世界に誘われます。さらに、指示に従って進むと、フランス語の発音とその特徴、日本語にない発音の解説、文字表記と発音の関係など、フランス語の発音のすべてを学ぶことができます。

会話は、大学の授業で使う教室用

21世紀COEプログラムに採択されている「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、e-learningで世界17言語を学ぶことができる「TUFSS言語モジュール」の開発を進めています。言語教育、言語学、情報工学の専門家が結集しての大型プロジェクトですが、これほど多くの言語学習システムの開発は、世界有数の言語教育機関であるTUFSS（東京外国語大学）にしか実現できないテーマです。インターネット環境さえあれば、誰でも、いつでも、どこでも、無料で、17の言語を学ぶことができる画期的な時代が到来します。

と、自分で勉強する学習者用に分かれています。学習者用をクリックすると、〈挨拶する〉〈感謝する〉〈比べる〉〈助言する〉など4つのカテゴリーに分けられた40の会話モジュールについて、それぞれ、「聞く・話す」「読む・話す」「聞く・書く」「読む・書く」の順で学習が進められます。

〈挨拶する〉の「聞く・話す」をクリックすると、画面にはスキット（寸劇）の会話映し出され、画面の下に日本語の字幕が流れます。次には、一つひとつの会話の発音を確認し、さらに、フランス語で表記された字幕を見ながら、発音を確認します。「読む・話す」では、同じダイアログ（会話）を使い、フランス語の字幕を見ながら学習を進め、最後のステップでは、自分の発音を録音して聞くことができます。「聞く・書く」では会話を聞きながら、書き取りの練習ができ、「読む・書く」では、単語や文章を覚え、書くことができるようになるレッスンが続きます。

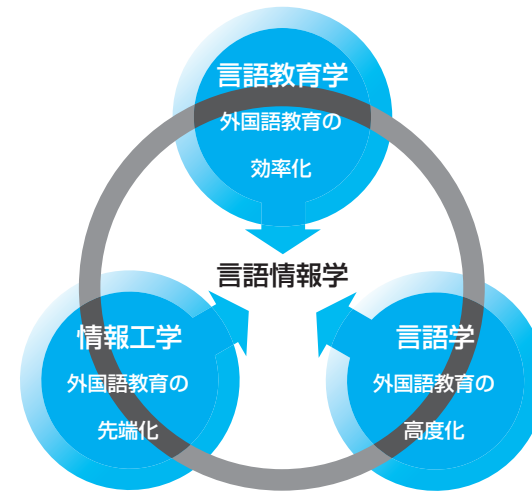
文法モジュールも、初心者が無理なく、効率よく自習できるように、工夫されています。

日本の外国語教育システムを根本から変革する可能性

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、17言語⁽²⁾についての「TUFSS言語モジュール」の開発を中心とするプロジェクトです。基盤となっているのは、それぞれの言語について外国語学部で行われてきた言語教育の蓄積です。ソフトで使われる映像に出演しているのはTUFSSの研究者や留学生で、すべてこのソフトのために撮影されました。

日本語は外国人学習者を、英語は英語を初めて学ぶ小中学生を、その他の言語は大学で学ぶ教材として利用することを想定して開発されています。将来的には、TUFSSで学ぶことができる26すべての専攻語の言語モジュールを開発する構想です。さらに、多言語版の開発により同じ教材をさまざまな言語で学ぶことも可能です。現在のところ、英語とモンゴル語と中国語で日本語の発音と会話を学ぶソフトが公開されていますが、今後も言語モジュールの多言語化が推し進められていきます。

TUFSS言語モジュールは、インターネット環境さえあれば、誰でも、どこでも、いつでも、無料で、世界の言語を学べる画期的なシステムで



す。それは、世界的に進行しているユビキタス環境や多文化・多言語主義の流れに対応した取り組みであるばかりでなく、日本の外国語教育のあり方に対する挑戦でもあります。

外国語学部では、すでにフランス語などで授業に利用しています。TUFSSのネットワークに登録すれば、利用者の学習状況が自動的に記録されるため、学生がいつ、どのくらい学習したかを把握することが可能です。また、海外青年協力隊でもカンボジア語等が利用されています。今後は、他大学や企業などで利用が広がることが予想されます。

言語情報学による言語研究と言語教育の統合

システムの研究開発は、言語情報学班を中心に、言語学班、言語教育学班、情報工学班の4つの班に分かれて進められています。

言語情報学とは、「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」形成の計画により、創成される新たな学問分野です。情報工学を基盤にして、言語研究と言語教育を統合した研究を行う学問分野で、言語情報学班は、TUFSS言語モジュールの開発と応用の全体を統括します。

言語学班は、プロジェクト全体を理論的に基礎付けることを使命とし、音声研究、コーパス言語学⁽³⁾、機能

別・目的別多言語コーパス⁽⁴⁾の構築に取り組み、研究の成果をTUFSS言語モジュールへ応用することを課題としています。

言語教育学班には、自然な会話をデータとして用いるためのシステム整備と分析法の開発、自然会話のデータ収集、収集データのTUFSS言語モジュールへの応用を行う談話班や、将来的に言語モジュール開発に利用できる日本語学習者用のデータベースや、英語学習者用の言語コーパスの作成、調査、分析などを行う第二言語習得班などがあります。

情報工学班は、TUFSS言語モジュールのe-learning化を推進しています。発音モジュール、会話モジュール、文法モジュール、語彙モジュールで構成される17言語の言語モジュールをウェブページ化し、インターネット上で公開するための技術的な原動力が情報工学班です。

拠点リーダーの川口裕司教授は、TUFSS言語モジュールの可能性を次のように語っています。

「ネット上の素材の修正や改訂は容易で、利用者の評価を聞いて進化させていくことができます。また、多言語版が充実すれば、いつの日にかカンボジア語でロシア語を学ぶなど、世界中の人々の言語教育に大きな貢献ができるプロジェクトになるでしょう」

世界有数の外国語教育機関の蓄積を基盤に、世界の人々が世界中の言葉をインターネットで学べる画期的なシステムを開発。

Notes

1

TUFSS言語モジュール

モジュールとは、「交換可能な構成要素」の意味で、言語学習のための素材を表す。TUFSS言語モジュールは、2005年内に17言語の会話モジュール、12言語の発音モジュール、7言語の文法モジュールが完成予定。

2

17言語

英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、インドネシア語、フィリピン語、ラオス語、カンボジア語、ベトナム語、アラビア語、トルコ語、日本語

3

コーパス言語学

コーパスとは、大量の言語資料体のこと。コーパス言語学では、諸言語のコーパスを作成し、それを言語分析し、言語運用データに基づく研究を推進する。

4

機能別・目的別多言語コーパスの構築

挨拶、質問、謝罪など言語の機能に着目した「コーパス」や、言語学、文化研究など特定の学問研究に資する多言語コーパスを構築する。

研究力 史資料ネットワークの拠点形成を目指す



藤井毅教授

Fujii Takeshi

アジア各国で、現代史を発掘

2003年から2004年にかけ、拠点メンバーの研究者や大学院生が、アジア各国やヨーロッパで、現代史発掘の調査研究を実施しました。

ベトナム近代史専攻の助教授はハノイに飛び、太平洋戦争期の日本軍政下のベトナム社会について、生存者から聞き取り調査を行いました。カンボジアの地域研究を専攻する大学院生はプノンペンで、植民地時代、ポルポト政権時代を生き抜いた踊り子のライフストーリーを、日本語教育史専攻の助教授は、タイ・バンコクで戦時中の元日本留学生にインタビューを行っています。ほかにも、中国やネパール、日本などでも聞き取り調査は続けられています。

これらは、「史資料ハブ地域文化研究拠点」のオーラルアーカイヴ班



山村の民家や役所の倉庫に眠る古文書や現代史を生き抜いてきた人々の記憶など、消滅の危機に晒されているアジア太平洋地域の貴重な史資料を調査、収集、保存、共有、発信する事業が、東京外国語大学で進められています。21世紀COEプログラムの採択を受けたこの「史資料ハブ地域文化研究拠点」プログラムは、地域研究の基盤となる史資料の収集保存事業を核として、史資料ネットワークのアジア太平洋地域の中核となる拠点形成を目指しています。

の研究活動です。インタビューの内容は、文字化され、個人情報と著作権が守られる範囲で、世界中の研究者の利用に供されていきます。

各国の機関・研究者と共同で“非収奪型”の史資料収集

アジア・アフリカ地域には、資金や技術、人材などの不足のため、多くの史資料が放置されたままになっています。諸地域の現代史を生き抜いてきた人々からの十分な聞き取り調査が実施されているとは言えません。また、各国の政府機関によって記述された公式の歴史では見落とされている、民衆の生活や文化の歴史の記述も充分ではありません。

一方、日本の地域研究では、これまで地域研究の基盤となる史資料の収集は充分には行われてきませんでした。植民地より大量の史資料を収奪したことへの批判を真摯に受け止め、現地機関との連携のもと史資料の共有を進める欧米諸国とは、顕著な違いが見られると言います。

こうした状況に一石を投じ、アジア太平洋地域における地域研究の拠点を形成するため、「史資料ハブ地域文化研究拠点」の事業は企画されました。その特色は、史資料の収集が、“非収奪型”の手法で行われる

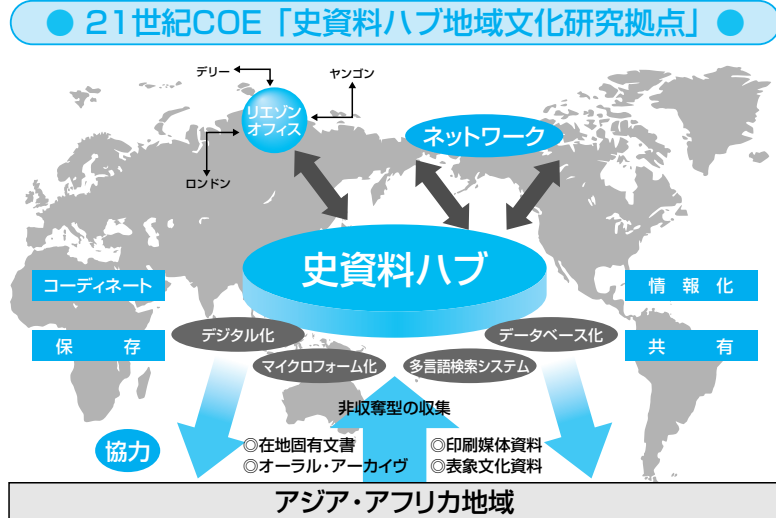
ことです。収集は、その史資料がある国の研究者や所蔵機関などと共同で実施し、撮影などによりデジタル化された史資料は、デジタルライブラリー⁽¹⁾を通してネット上で公開され、共有されます。

もちろん、拠点は資料の収集保存発信に留まらず、地域や文化の生成と変容を明らかにする、領域横断的な地域文化研究を推進します。プロジェクトには多くの大学院博士課程の若手研究者も参加し、拠点は海外での史資料収集研究を通して、次代の研究者を育成する教育拠点の役割も果たします。

貴重な資料を消滅の危機から救う

調査の対象としているのは、アジア太平洋地域の中の東南アジア・南アジア諸国、それにトルコとモンゴルです。調査研究は、全体を統括する史資料統括班と、実際に資料収集と研究にあたる5つの班で進められています。

在地固有文書班は、印刷資料が流通する前の時代に残された手書き文書を収集します。アジア各地には乾燥椰子葉に書いた貝葉文書や木片に書かれた白樺文書、厚紙を蛇腹のように折り畳んだ折り畳み写本など、



特徴ある文書がありますが、その重要性が認識されず、焚き付けに使われるなど、消滅の危機に瀕したものもあると言います。研究班はそうした文書を現地の研究機関などと共同で収集保存する一方、撮影してデジタル化し、広く世界に発信します。

印刷媒体資料班は、ヨーロッパとアジアの関係を明らかにするため、ヨーロッパに残されたアジア研究の資料を収集します。オーラル・アーカイヴ⁽²⁾班は、冒頭で紹介したような各地での聞き取り調査のほか、アジアで保管されているオーラル資料の調査も実施しています。

表象文化資料班は、これまで歴史や地域研究で無視されてきた、漫画やアニメ、映像、画像、音楽などに焦点を当て、地域の人々の具体的な姿を明らかにしていきます。

地域文化の生成と変容に関して、理論面の検討を行うのが、21世紀地域文化研究班です。

新しい形の国際貢献

「国際的な研究教育環境と現地語史資料の蓄積、高度な情報基盤。史資料ハブを担えるのは、この3つの要素に支えられているからです」

拠点リーダーの藤井毅教授は、TUFSがアジア太平洋地区の地域研究の拠点を形成できる理由を、そう説明しています。

拠点メンバーや協力研究者の大半は、長期にわたる海外での研究経験があり、世界諸地域の研究者研究機関との間に密接なパイプを持っています。これらのネットワークがプロジェクト推進の原動力となっています。また、TUFSでは50を超える言語の教育研究が行われていて、それらの言語で表記された史資料の収集に深く関わってきた蓄積があります。さらに、キャンパスへの移転にともないIT環境が飛躍的に進展し、収集保存した史資料発信の情報センターとしての役割を果たすことができます。

拠点を事業をきっかけとして、国際貢献も実現しています。「アフガニスタン文字文化財復興支援」とスマトラ島沖大震災・大津波⁽⁴⁾後の「アチェ文化財復興支援」の活動がそれです。アフガニスタンでは、前政権下で破壊された文化財のうち、文字文化財の収集修復などの支援を、アチェでは大津波によって被災した史資料復旧の緊急支援と、アチェに存在する史資料の調査・保存のため長期的な研究支援を行います。

「巨額の資金を投じる開発援助だけではなく、現地の研究者らと共同で、意義ある研究活動を行う拠点事業も復興支援事業も、これからの国際貢献の新しい形だと自負しています」(藤井教授)

プロジェクトは、文化事業による国際貢献の一翼を担っています。

海外での研究活動経験豊富な研究者が、ネットワークを活かし、アジア諸地域に眠る史資料を発掘する。

Notes

1

デジタル・ライブラリー (digital library)

電子図書館プロジェクト。附属図書館と連携し、「多言語デジタルライブラリー」を構築し、資料ハブ機能をインターネット上で実現する。

2

ハブ(hub)

車輪の中心にあってスポークを支える部品のこと。転じて、活動や交通の中心、中枢を意味する。史資料ハブとは、史資料の収集と発信の機能を持つ、地域研究の中枢を意味する。

3

オーラル・アーカイヴ (oral archive)

口述で伝えられた記録や物語、人々の記憶などを、聞き取り調査し、録音や文書化して保存した資料集。

4

スマトラ島沖大震災・大津波

2004年12月26日、インドネシアスマトラ島沖で発生した大地震と、それにとまうインド洋大津波のため、南・東南アジア諸国、アフリカ西岸諸国に甚大な被害を与え、死者・行方不明者は30万人近くに及んだ。